

第五回 平成二十三年九月十七日



阪神間の近代建築

川窪 広明

川窪です。本日は、よろしくお願ひします。これからパワーポイントを使って講義を行いたいと思いますので、電灯を少し落とさせていただきます。

さて、人間が地上に出現して以来、建築は人間のあらゆる生活シーンで必要とされてきました。生活シーンというのは、日常の生活、それから社会生活あるいは宗教活動、こういうものがすべて含まれます。したがって、人間の歴史が記録されてきたように、建築の歴史も記録され、建築史という学問分野が作られています。今回は、阪神間の近代建築というタイトルで、明治時代から昭和四十年代にかけて建てられた建築についてご紹介するとともに、来月、見学を予定しているヨドコウ迎賓館（旧山邑邸）についてもお話させていただきたいと思います。

最初に「日本における近代建築とは」として、近代建築の歴史と意味について話をさせていただきます。次に「阪神間の近代建築」として、関西を拠点として建築活動を展開した建築家三名の作品を紹介させて

いただきます。続きまして、「建築の寿命と保存・活用」としまして、建築の寿命に対する考え方をお話ししたいと思います。そして最後に、「フランク・ロイド・ライトとヨドコウ迎賓館（旧山邑邸）」の話を見せていただきますと考えております。

一、日本における近代建築とは

ヨーロッパでは、産業革命以降、つまり専制国家の時代が終って、国民国家が誕生した十八世紀末から十九世紀初頭を近代の始まりとしています。

産業革命は、あらゆる産業の分野に大きな影響を与えましたが、建築の分野も例外ではなく、ガラスや鉄という工業製品を材料とした建物が造られるようになりました。一八五一年のロンドン万博で造られたクリスタルパレスや、一八八九年のパリ万博で造られたエッフェル塔がその代表例です。当時とすればびっくりするような建物だったと思いますが、この二つの建物はすべての部材を工場で作って現場で組み立てた、いわゆるプレハブ建築のはしりでもありません。つまり、近代建築は産業革命の原動力となった機械力を利用して、装飾を廃し、合理性と機能性を追求するという新しい社会の状況に合わせてつくられた建物でもあります。ヨーロッパ建築では、ギリシャから始まって、ゴシックやルネサンスといった手の込んだ

だ様式主義が支配的でしたが、産業革命が建築の世界に大きな変革をもたらしました。また、先ほどお話ししたように、職人の手で加工される石材に代わって、工場で生産された鉄、ガラス、あるいはコンクリートが主要な建築材料となりました。

では日本はどうだったのでしょうか。日本の歴史を近世、近代、現代というふうに区分すると、諸説はありますが、一応、江戸時代を近世、それから明治維新から戦後までを近代、戦後を現代とするのが通説です。

ただ、日本における近代建築という言葉の「近代」は、この歴史的な区分とは時間的に少し異なるようです。ヨーロッパの近代の夜明けとなった産業革命は、日本の江戸時代に起こっています。その影響が日本に伝わったのが江戸時代末期、一八五三年の黒船来航時と考えると、産業革命後に造られるようになった建物を近代建築とするならば、建築における「近代」という歴史区分が一般的な歴史区分と異なっても当然かもしれません。

黒船来航以降、江戸幕府にとって近代的な軍事力を持つ西洋列強は大きな脅威となりました。そして、西洋列強に対抗できる軍事力強化を目的として、製鉄所や造船所が幕末から造られるようになりました。その例としては、佐賀藩によって造られた反射炉や、横須賀に造られた幕府の造船所があります。これらの建物は、日本の在来工法で大工が造るのは不可能であり、佐賀藩の製鉄所はオランダの技術指導によっ

て、また幕府の横須賀の造船所は、フランス人技術者を招聘して建設されたものといわれています。別の見方をすると、このような建築は、幕末から日本も産業革命による技術革新を積極的に取り入れたという証拠ではないでしょうか。すなわち日本における近代建築は、明治維新より少し先にスタートしていたこととなります。

明治維新後、富国強兵策が推進され、朝鮮半島や台湾支配、それに続く中国支配と列強国と同じような道を歩み始めた日本にとって、近代建築の建設は必要不可欠なものとなりました。また、第二次世界大戦の戦災復興、さらにその後の経済成長にとっても必要不可欠であり、その流れは一九七〇年代ごろまで続きました。しかしながら、七十年代後半から八十年代前半にかけて、近代建築と呼ばれる建築の流れは一応終わりを告げたといわれています。そして、それに代わるものとして、「ポストモダン」と呼ばれる建築が姿を現しました。したがって近代建築とは、図1において点線で囲んだ部分と言えるでしょう。

それでは、次のスライドから、近代建築について、もう少し詳しい話をしてみたいと思います。

日本の近代建築が、日本人の建築家によって、最初から設計されたわけ

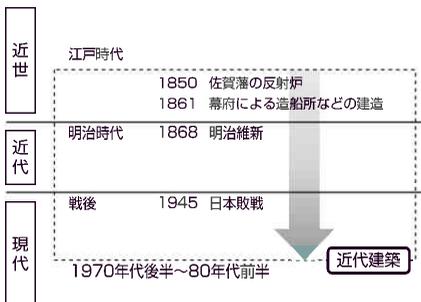


図1 近代建築の歴史区分

ではありません。最初の四十年ぐらいは、日本が西洋から新しい建築技術を学ぶという、いわば近代建築の萌芽期でした。日本初の建築の歴史学者といわれる伊東忠太は、この時代を「移植時代」と呼んでいます。近代建築史の研究者によると、この移植時代には三つの意味があるといわれています。

第一は、新規産業のために近代建築が建てられたということです。新規産業のための近代建築とは、富国強兵に関連した産業、具体的には、各種工場、鉄道の駅舎、兵舎、官庁などの規模の大きな建物のことです。

明治維新直後、官庁は、江戸時代の大名屋敷を使って運営されたそうですが、西洋諸国を追って近代国家を目指す日本にとっては、国家の威信にかけてどうしても大規模な西洋建築で官庁の建物を造る必要があったのでしよう。そのような建築に使われる材料は石やレンガであって、日本の大工が簡単に造るといふわけにいきませんでしたから、外国人技術者を招聘する必要がありました。ただ、日本の大工もこの時に全く仕事がなかったというわけではありません。大きな建物の建設は無理でしたが、現在でも神戸に残されている異人館、すなわち洋館のような木造建築は、日本の大工も見よう見まねで造っていたといわれています。

ただ、彼らにとって洋館の仕上げを西洋の工法で造ることは難しかったので、代替策として伝統的な工法を用いました。壁を例にあげると、防火対策に土壁を、また装飾に左官技術を用いて仕上げたわけです。

さらにこの時代には、民間において近代建築の工事を請け負う会社が設立され、新しい技術が蓄積されるようになりました。このような会社の中には、現在のゼネコンの母体となっているものもあります。

第二は、建築に関する教育機関の設立です。近代建築を設計する「建築家」という職能は、それまでの日本にはありませんでした。したがって、近代建築を推進するためにも日本人の建築家を育てる必要があります。

そこで日本初の建築教育機関として、一八七一年に工学寮造家学科が東京に設立されました。これは一八七七年に工部大学校と改名され、現在の東京大学工学部建築学科の前身となりました。工学寮造家学科には、外国人の教師が招聘されて教育に当たりました。そして彼らに学んだ日本人の学生たちが、後に大学の教鞭を取るようになりました。

招聘された外国人の教師の中で、最も有名なのは、ジョサイア・コンドルでしょう。彼は、一八五二年ロンドンに生まれたイギリス人です。一八七七年に来日して、工部大学校の教師を務めました。一九二〇年に東京で亡くなりましたが、この間、彼はロンドンにはたった二回しか戻らず、生涯のほとんどを日本で過ごしました。

コンドルは、大学校で教鞭を執りながら、日本でいくつかの建物を設計しています。代表的な作品としては、鹿鳴館やニコライ堂、それに丸の内の三菱財閥の三菱一号館がありますが、鹿鳴館はネオバロック

様式、ニコライ堂はビザンチン様式、三菱一号館はクイーン・アン様式というヨーロッパの異なる様式で造られています。これは、コンドルがヨーロッパの異なる様式の中から、日本に合うものを模索していたことを示すものかもしれません。

コンドルの死後は、彼の教え子である辰野金吾、あるいは曾禰達蔵が教職を引き継ぎました。コンドルの一番弟子とも言える辰野金吾は、一八五四年に佐賀県生まれで、一八七九年に工学寮造家学科を首席で卒業しています。その後、英国留学を経て、東京帝国大学の教授に就任しました。彼も大学で教鞭を執りながら、いくつかの建物を設計しており、代表的な作品には日銀本店や東京駅があります。

また、辰野金吾は、神戸にも作品を残しています。写真1は、神戸市地下鉄海岸線の「みなと元町駅」ですが、元々は第一銀行神戸支店として造られた建物でした。東京駅と同じく赤レンガの壁に白い横のラインや窓枠を持つ「辰野式」を踏襲しています。阪神・淡路大震災の前までは大林組の神戸支社として使われていましたが、震災で大きな痛手を受けて、建物としては使えなくな



写真1 神戸市地下鉄海岸線みなと元町駅（辰野金吾、旧第一銀行神戸支店）

ってしまいました。しかし、神戸市などの努力により、歴史的な資産として壁面の一部分を地下鉄駅の入口として再利用することになったのです。現在は、経済産業省から近代化産業遺産に指定されています。

それから、辰野金吾の同窓生である曾禰達蔵も、神戸に作品を残しています。海岸通りにある日本郵船ビル（写真2）で、こちらは現在でも店舗として使用されています。

移植時代の第三の意味として、建築資材の国産化があげられます。鉄やコンクリートなどの建築資材は、それまでの日本にはなかった材料ですから、最初は輸入に頼らざるを得ませんでした。そこで明治政府は、これらの資材の国産化を急ぐために埼玉県にレンガ工場を設立し、一八八〇年代末には、一日に約六万個の生産を上げられるようになったそうです。また、これらの資材は、軍事用にも非常に重要な資材だったので、積極的な政府の指導によって、多くの工場が造られるようになりました。

それでは、次にモダンイズムの話に入りたいと思います。建築におけるモダンイズムは、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてヨーロッパに起こった建築運動で、簡単にいうとそれまでの様式主義を捨てて、建



写真2 日本郵船ビル（曾禰達蔵）

築の理念として機能と合理性を求めようとする運動です。

明治初期の近代建築移植時代は、外国人建築家にすべてを頼っていました。やがて日本人の建築家が独り歩きできるようにりましたが、その日本人建築家も外国人から学んだ様式主義を踏襲した建物を設計していました。まず「様式ありき」で様式に従った建物を建て、その内部に目的の機能を入れたというところで、「機能を分析してそれに合った合理的な建物を造る」というモダニズム的設計思想は存在しなかったのです。すなわち、モダニズムの本質である機能性とか合理性とはかけ離れた建築だったのです。

これではいけないということで、当時、東京帝大の建築科の学生であった堀口捨己と石本喜久治らが一九二〇年に分離派というグループを結成しました。そして、日本人建築家として第二世代にあたる堀口らは、分離派宣言を行って今後の建築の方向性をより高度なものにしようとなりました。日本のモダニズム建築は、このグループの誕生が原点であるといわれています。

配布した資料にも紹介させていただきましたが、「我々は起つ」という刺激的な言葉で始まる分離派宣言は、「総ての建築をして真に意義あらしめる新建築圏を創造せんがために」「理想の実現のためには我々の総てのものを悦びの中に献げ、倒るるまで、死にまでを期して」といった過激なアジテーションになっています。私は大学の教員ですが、この宣言を起草したのが大学生であったということに驚きを覚えます。そして現代の学生と比べると、「夢の描き方」に大きなギャップを感じてしまいます。

さて、堀口捨巳は、その後建築家として活躍しますが、代表的な作品として小出邸という住宅があります。この住宅の設計では、西洋建築と日本建築のエッセンスを融合させた表現が試みられたといわれています。現在、小出邸は、東京の小金井にある「江戸東京建物園」に保存されています。

次に一九八〇年代に流行した、ポストモダンについて簡単にお話します。

一九八〇年代初頭には、合理性や機能性を追及し続けてきたモダニズム建築が、あまりにも単調な景観をつくり出した、まちをつまらないものにしたという批判や反動が起き、過剰な装飾やあつと驚く奇妙なデザインの建築が出現しました。このような建築の流れは、ポストモダンと呼ばれています。

過去においても、ある一つの建築様式が長く続くと、それに対する反動が起きたことがあります。例えば、ヨーロッパにおけるゴシック様式も、最初は非常にシンプルなデザインでしたが、だんだんと装飾過多になり、やがてその反動としてルネッサンス様式が登場したといわれています。

私たちの身近にあるポストモダンの建築としては、神戸のメリケンパークにあるフィッシュダンスホール（写真3）があげられます。この作品は、フランク・O・ゲーリーという建築家の設計です。彼は、現在でも世界中で活躍している建築家ですが、彼のスタイルは脱構



写真3 フィッシュダンスホール
（フランク・O・ゲーリー）

築主義と呼ばれ、アンバランスなデザインを意図的に用いるのが特徴です。また、かつて大阪の戎橋に建っていた高松伸のキリンプラザ大阪もポストモダン建築です。

二、阪神間の近代建築

それでは次に、阪神間の近代建築に関連した建築家から三人を選んで、その作品を紹介していききたいと思います。今回お話しさせていた
だく三人は、村野藤吾、ウイリアム・メレル・ヴォーリズ、そして清水栄二です。

それでは、村野藤吾の建築から紹介していききたいと思います。私は、
村野藤吾は歴代の日本人建築家の中で、最も才能豊かな建築家である
と思っています。

村野藤吾は、一八九一年に佐賀県で生まれました。高校を卒業して
一旦製鉄所に就職しましたが、一九一八年に早稲田大学に入学し、建
築を学びました。そして早稲田大学卒業後、大阪にある渡辺節建築事



写真4 商船三井ビルディング（渡辺節建築事務所）

務所に入所します。渡辺節建築事務所は、関西に多くの作品を造った建築事務所ですが、阪神間で有名なものとしては、神戸の海岸通りにある商船三井ビルディングがあります（写真4）。現在は、一階が大丸のインテリア売り場として使われています。また、神戸市東灘区には、旧乾邸という住宅があります。乾邸は二、三年ぐらい前までは見学可能でしたが、残念ことに現在は見学できません。ここは『華麗なる一族』という映画の最初のロケ地として使われたほど見事な邸宅です。山崎豊子の『華麗なる一族』に登場する万俵家は、海運で財を成したという設定になっていますが、この乾家もやはり海運で財を成した一族でした。

村野さんは一九二九年、渡辺節建築事務所から独立して自分の設計事務所を開設しました。独立後の作品には、「あれ、これも」というほど私たちにとってなじみ深い建物が数多くあります。もちろん皆さんもご存じの建物だと思えます。また、村野さんは長寿を全うされた方で、一九八四年に九十三歳で亡くなりましたが、死の直前まで仕事をしていたという逸話が残されています。



写真5 宝塚市役所（村野藤吾）

きょうは、村野藤吾の晩年の作品である宝塚市役所を紹介したいと思います（写真5）。

宝塚にお住まいの方にはおなじみの淡いピンク色をした地上三階、地下一階建ての鉄筋コンクリートの建物です。村野さんがこの作品を設計したのは一九八〇年、彼が八十九歳のときです。

写真中央に見える筒のような部分は、市会議場です。この議場の円筒が空に突き出したデザインは、エリック・グンナル・アスプルンドというスウェーデンの建築家が設計したストックホルム市立図書館のデザインに似ているといわれます。村野さんは、渡辺節建築事務所からの独立直後にヨーロッパ旅行をしており、ストックホルム市立図書館も訪れます。宝塚市役所は、その旅行から五十年後に設計されたことになりましたが、私にはこのデザインが、建築家という職能の遺伝子によって時を超えて継承されたものと思われまます。この議場の形も半世紀をかけて村野さんの内部で熟成され、宝塚市役所に使われたのでしょうか。

一方、ストックホルム市立図書館では、円筒形をした建物の内壁に沿って本棚が並んでいます。このような本棚は、利用者にと



写真6 大英博物館図書館内部

って本を探すのに使いやすい形であるとは思えません。しかし、この本棚の配置は、一八五七年に造られた大英博物館の図書館と同じです。大英図書館も同じように円筒形の内部に沿って本が並べられています（写真6）。アスプルンドは、当時、世界の知の集積地として名を馳せた大英博物館の図書館にそのヒントを得たのではないかと私は思います。これもデザインが時を越えて継承されたものに違いありません。

話は変わりますが、東大阪市に安藤忠雄さんが設計した司馬遼太郎記念館があります。そこには高さ十一メートルぐらいのコンクリートの壁面に二万冊もの本が並べられています。安藤さんによると、これは二万冊の本に匹敵する知識を持つていたといわれる司馬遼太郎の頭脳を象徴しているそうです。

写真7は、宝塚市役所の中庭です。この市役所は、中庭が人々の憩いの空間となるようコの字型に建物が計画されています。建物には、外側の円柱と内壁との間にベランダが設けられています。

先ほど、村野さんが三十年代にヨーロッパを旅行して、数々のモダニズム建築を見て、大きな刺激を受けたと話しましたが、見学した建築についてすべて



写真8 バウハウス校舎（グロピウス設計）



写真7 宝塚市役所中庭

を肯定的に受けとめたわけではありません。例えば、有名なモダニズムの建築家であるグロピウスが設計したパウハウスの校舎（写真8）に対して、そのガラスのカーテンウォール―建築用語で、カーテンのように上からぶら下げられて、建物を支える役割を持たない壁を言います―を厳しく批判しています。「あのガラスのカーテンウォールの意味が分からない、あれこそモダニズムという別の様式主義に陥ったものだ」と。つまり従来の様式を否定することが、「これでなくてはいけない」という様式をつくったと批判したわけでは

また、村野さんは、この建物の内部環境についても言及しています。「内部が暑すぎないか」と。太陽が広いガラス面から差し込んでくるので室内の冷房費がかさむだろうというのです。実際にそうだったようです。また話は変わりますが、神戸地方裁判所を改修したとき、元の古いレンガ造の建物を半分残し、その上にガラス箱のようなカーテンウォールの上階を載せました（写真9）。私の知り合いの裁判官は、「神戸地裁は、夏、暑くてたまらなかった。」と言っていました。ガラスのカーテンウォールは先端技術のように思えますが、エネルギー的な欠点があるということです。



写真9 神戸地方裁判所

その点、ベランダを持つ宝塚市役所は日差しを直接受けにくい設計であると考えられます。すなわちベランダが庇となり、室内環境に対する外部環境の影響を和らげるクッションのような役割を果たすからです。さらに建物の外観デザインにも彫りの深い表情を与える役目を果たしています。写真7からもわかるように、ベランダの底部は円柱と円弧を描いて接合し、有機的な一体感を感じさせます。このようなディテールも建物外観の表情を作り出す要素となっています。

写真10は、この建物を北側の道路から写したものです。一定の間隔で並ぶ円柱と照明灯、そして一階のベランダの「空き」の空間は、軽やかなリズム感を生み出し、道を行く人に巨大な市役所の建物の量感を感じさせません。また、この写真は、九月九日の三時ぐらいに撮影したのですが、ベランダの端から眺めると、すべての円柱の表面に照明器具の影が投影されています。もしかすると、村野さんは、このような影の出現を知った上で照明器具の配置を計画したのかもしれませんが。

次に、この市役所の玄関ホールを紹介したいと思います（写真11）。この写真



写真11 宝塚市役所玄関ホール



写真10 宝塚市役所北面

はフラッシュを使って撮影したので明るく見えますが、実際は意外に暗い空間です。一階から上を見上げると、床から二階デッキまでの高さ、二階デッキからホール天井までの高さの比が大きく異なることがわかります。それから、通路の手すりにおもしろいものがあります。下から見上げた時、手すりに椅子が取り付けられているように見えたが、まさか本当に椅子が取り付けられているとは思いませんでした。これはガーデンニングチェアの背もたれ部分を切って、はめ込んだものなのです（写真12）。こんな遊び心も村野さんは大切にしたんじゃないかなと思います。

宝塚市役所もそうですが、村野建築にはパターンの繰り返しによって、建物全体のデザインが構成されている作品がいくつもあります。他の例としては、千里ニュータウンの南地区センターがあります（写真13）。建物の全長は六十メートルほどで、南と東西の壁面は、二種類の窓が交互にはめ込まれたデザインで構成されています。さらに窓自体にも表情があり、窓台や窓枠に十数センチの凹凸の違いが設けられています。このような窓の並びが、六十メートルの長さの壁面にリズム感を与えています。



写真 13 千里南センター（村野藤吾）



写真 12 ホール2階手すりにはめ込まれたガーデンチェアの背もたれ

次に、ヴォーリズの作品について紹介したいと思います。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズは、一八八〇年にアメリカのカンザス州に生まれました。コロンビア大学の哲学科を卒業した後、一九〇五年に滋賀県立商業高校の英語教師として来日します。しかし、ここでいろいろあったようで二年で教職を解雇されました。その後、ヴォーリズは、キリスト教のミッションを創設するとともに京都で設計事務所を開設しました。

ヴォーリズは、建築事務所のほかにも実業家としてメンソレータムの近江兄弟社、また教育者として近江兄弟学園を設立したことも有名です。彼は第二次世界大戦が始まる前に、日本国籍を取得し、「一柳 米来留（ひとつやなぎ めれる）」と改名しました。そして一九六四年に八十三才で死去しました。

今回、ヴォーリズの作品として関西学院大学を紹介したいと思います。

関西学院大学は、一八八九年（明治二十二年）、神戸市灘区の現在王子公園がある場所に設立されました。その時、ヴォーリズは、いくつかの学舎を設計しています。ヴォーリズの設計ではありませんが、王子公園の横には当時のチャペルが残されています。その後、一九二七年に関西学院大学は西宮市上原に移転が決まり、キャンパス全体をヴォーリズが計画、設計しました。

上原キャンパスは、敷地面積が二十万平方メートルほどあり、その中に二十五棟の学舎、十六棟の教員宿舎が建てられています。これらの建物のデザインは、スパニッシュ・ミッションスタイルと呼ばれるも

のです。スパニッシュ・ミッシェンスタイルというのは、カリフォルニアの風土の中で形作られたもので、カリフォルニアの明るい光と暖かい風土を思わせる建築様式です。カリフォルニアは、もともとスペインの支配下にあり、十八世紀にスペインから派遣された神父がこのような建物を設計して以来、この様式はカリフォルニアの伝統的な様式となったといわれています。

スパニッシュ・ミッシェンスタイルの特徴は、赤い屋根と漆喰塗りの壁ですが、この様式を日本に最初に持ち込んだのがヴォーリスで、彼は関西学院大学以外にも、神戸女学院や広島女学院といったミッシェン系の大学の設計にこのスタイルを用いています。

関西学院大学で最も印象的な建物は、写真14の中央にある時計台だと思います。正門から構内に入ると、時計台との間に、面積七千平方メートルほどの長方形の中庭があります。私は、この時計台が関西学院大学のシンボルであるとともに学舎群のプロポーシオンを印象づけるものとして大きな役割を果たしていると思います。正門と正対した位置にある時計台は、独立した存在には見えません。中庭両側に並ぶ学舎を連結し、中庭を囲んで一体化した学舎群としての存在に感じら



写真 14 関西学院大学の時計台と学舎群
(ウイリアム・メレル・ヴォーリス)

れます。

時計台の高さも控えめです。もちろん時計台ですから、他の学舎よりは高いわけですが、東大の安田講堂や京大の時計台のように権威的な威圧感を感じさせる高さではありません。シンボリックな存在ではありませんが、学舎群の一体感を損なうことのない「程よい高さ」に思われます。

また、キャンパスの構成を考えると、時計台の背後にある甲山の存在にも着目すべきでしょう。図2のように甲山山頂と大学の正門、中庭、時計台は一直線上に並んでいます。すなわち正門から甲山まで強い軸線が通っているのです。当然ヴォーリズは、この軸線を意識してキャンパス計画を行ったはずで、そして、時計台の形にもこの軸線の意味を表現したと思います。

甲山は、その名の通りお椀を伏せたような左右対称の形を持った山です。写真15をご覧ください。時計台を正面から見ると、甲山の頂上は、時計台の頭頂部と同じ位置にあります。また、甲山の左右の斜面と、時計台裏の学舎の屋根の傾きはほぼ同じです。さらに時計台の前に植えられた二本のヒマラヤスギに注目してください。二本の幹が、屋根の棟、すなわち屋根の一番上の部分を通過しています。もちろんヒマラ

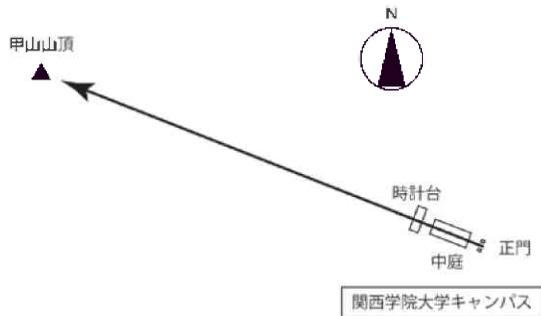


図2 関西学院大学キャンパスと甲山を結ぶ軸線

ヤスギが植えられた時は、このような大木ではなかったでしょう。しかし、ヴォーリスは、将来ヒマラヤスギが成長した時のことを考えていたのではないかと思います。さらにヒマラヤスギの枝振りも左右対称です。

日本には、自然の景観を背景として取り入れる「借景」という伝統的な造園の技法があります。ヴォーリスは、関西学院大学のキャンパス計画に借景として甲山を取り入れたと同時に、その形の対称性を時計台や学舎群の対称性を強調するためにも利用したのです。建物のデザインはアメリカから持ち込まれたものですが、キャンパス全体の計画には、日本の伝統的な技法が用いられているところが面白いですね。また、色彩的にもスパニッシュ・ミッシヨンスタイルの赤い瓦屋根を、手前のヒマラヤスギと奥の甲山の緑が引き立てています。なお、この関西学院大学上原キャンパスは、二〇〇九年に近代化産業遺産に、また時計台は、国の登録有形文化財に指定されています。

さて、ヴォーリスは、北海道から九州まで住宅、学校、商業施設、さらには教会など、千五百軒にも上るさまざまな建築を手がけました。先ほどヴォーリスの経歴をお話しましたが、彼はウイスコンシン大学哲学科の出身であり、大学では正式な建築教育を受けていません。私には、ヴォーリスがどこどのような



写真 15 時計台と甲山の対称性

に建築の勉強をしたのか不思議に思われます。ヴォーリズの研究家は、おそらくその答えをご存じかも知れません。ただ、ヴォーリズは建築家の他、牧師であり、実業家であり、さらに教育者でした。そしてアメリカから来日して布教活動を行い、事業を興し、学校を設立しました。このことからヴォーリズが、アメリカ人的フロンティアスピリットに溢れた人物であったことが想像できます。建築についても、設計事務所設立時にアメリカから招いた建築技術者と一緒に仕事をしながら、独学で知識や技術を意欲的に学び取っていたのではないかと思われまます。

神戸にもいくつかのヴォーリズの作品が残されています。その一つが、旧居留地三十八番館という建物です（写真16）。この建物は、一九二九年にナショナルシティ銀行の建物として造られましたが、現在では大丸神戸店の南館として使用されています。阪神大震災まで使用されていた大丸店の建物は、村野藤吾の設計です。震災以前は、両巨匠の作品が並び立っていたわけですね。

面白いことに、大阪・心齋橋にも両巨匠の作品が並び立っていました。大丸心齋橋店と心齋橋そごうで



写真 16 旧居留地三十八番館（ウィリアム・メレル・ヴォーリズ）

す。ただし、こちらは大丸がヴォーリズの設計で、そごうが村野藤吾の設計です。残念ながら村野藤吾が設計したそごうの方は、すでに取り壊されてしまいました。

また、ヴォーリズが設計した関西学院大学とともに関西の名門私学として「関西同立」と称される大学のひとつ、関西大学には村野藤吾設計の学舎があります。ヴォーリズも設計に関わった旧関西学院大学があった王子公園には、村野藤吾設計の旧兵庫県立美術館があります。私は、関西を拠点として活躍したほぼ同世代の二人の建築家には、何らかの因縁があったように思われてなりません。

それでは、三人目の建築家として、清水栄二を紹介したいと思います。清水栄二は、一八九五年兵庫県武庫郡六甲村、現在の神戸市灘区に生まれました。一九一八年に東京帝国大学を卒業した後、一九二七年に神戸市役所に入所しました。そして、その二年後には営繕課長に昇進しています。現在では、このような早い出世は考えられないでしょうが、当時は大学で建築教育を受けた人材が少なかったということでしょう。清水栄二は、村野藤吾やヴォーリズのように全国的な知名度は少ないと思いますが、神戸市内には彼の設計した建築がまだいくつも残されています。その中から、今日は御影公会堂を紹介したいと思います。

御影公会堂は、一九三三年に灘の酒造会社、白鶴の社長であった嘉納治兵衛が寄贈した二十四万円によって建てられました。嘉納治兵衛は、他にも同じく清水栄二設計による白鶴美術館や、桜正宗や菊正宗と

いった灘の酒造会社の経営者と共同で灘中学を設立して、神戸の文化、教育面に多大な貢献をしています。

さて、御影公会堂は、地下一階、地上三階建ての鉄筋コンクリート造の建物として、一八九九年に国道二号線が石屋川と交わる北東の角地に計画され、翌一九〇〇年に竣工しています（写真17）。国道二号線に面する南側は、ガラスが多く使われた軽快な壁面です。その入り口上部に並ぶ柱は、ゴシック建築のように建物の垂直方向への伸びを感じさせます（写真18）。これらの垂直な柱に対し、ベランダが水平方向に鋭く伸びて直角に交わっています。さらにガラス壁を構成する窓枠にも、同様な直角の交わりが表現されています。

一方、石屋川に面した西側は、スクラッチタイルが貼られた重厚な壁面となつています（写真19）。「スクラッチ」というのは「引っ掻く」という意味です。スクラッチタイルとは、タイルを焼成する前に釘で引っ掻いて傷を付け、タイル表面に表情を持たせたタイルのことです。清水栄二は、このような異質な壁面が交差するコーナーを円筒形にすることで連続性を感じさせるものにしていきます。



写真 18 御影公会堂南面の玄関部分



写真 17 御影公会堂（清水栄二）

また、西面の三階にある窓に注目して下さい。石屋川は、六甲山の方から海に向かつて流れています。したがって川沿いの道も海に向かつて、すなわち南に向かつて傾斜しています。ところが三階の窓は、南に向かつて階段状に上つてゆく並びとなっています。清水栄二は、川沿いの道と窓の傾斜方向の違いを利用して、西から眺めたとき、建物が南側に開いたように見えるデザインとしたのではないでしょうか。

この建物の玄関を入ると、エントランスホールが一番奥に嘉納治兵衛の胸像が飾られています(写真20)。また、ホール左右の棚には灘の銘酒が並べられています。そして天井を見上げると、円柱と梁がアーチ状に交差しているのがわかります。ただ、柱や梁の漆喰の剥がれが目立っているので、もう少し手入れをしてほしいものです。

円柱の柱頭の部分は木製です。これはコンクリートの柱を作ってから、柱頭に木製の輪を取り付けたものです。それから、写真21はホール内部に使われている照明器具ですが、船に使用される防水仕様の照明器具を思わせるデザインですね。これも港町神戸にちなんだデザインではないでしょうか。



写真20 御影公会堂エントランスホール



写真19 御影公会堂西面

最上階の三階階段室上部には、トップライトがあります（写真22）。現在、このトップライトには透明なガラスが使われていますが、かつては色ガラスが使われていたそうです。

さて御影公会堂は、建設以来、一九三八年の阪神大水害、第二次世界大戦の空襲、それから阪神大震災と三つの大きな災害に遭遇しています。以前、野坂昭如の『火垂の墓』という小説がアニメ映画化されました。その映画の中では、この御影公会堂が焼け野原の中にぽつんと残されているシーンが印象的に使われていました。また、阪神大震災の時には、この建物が周辺住民の避難所として使われました。清水栄二は、耐震性に関して造詣が深く、御影公会堂の基礎には、当時としては珍しい厚さ一メートルもの耐震用のコンクリート基礎を用いたそうです。阪神大震災では、この基礎が古い公会堂を倒壊から救ったといわれています。

ただこの建物にも、現在、利用者の減少という今までの災害とは異なった危機が訪れています。建設当時の御影町の人口は、二万人弱だったそうです。しかし、御影公会堂は、当時の公共施設としては先進的な大講堂や大食堂などを



写真 22 三階階段室上部のトップライト



写真 21 ホール内部の照明器具

備え、八百人を収容することができました。すなわち村の規模に比べると、非常に立派な施設だったわけです。さらに一九五七年には公営の結婚式場が設置されました。全国的に流行ったシンプルライフを指す風潮に乗って利用者が増加し、最盛期の一九六四年には千組以上のカップルがここから誕生したといわれています。しかし、その後は結婚式をホテルで挙げるカップルが増え、一九八七年に結婚式場は閉鎖されてしまいました。

以上、関西を代表する三人の作品を紹介させていただきました。

三、建築の寿命と保存・活用について

次は、建築の寿命と保存・活用についてお話させていただきます。

ここ数年、近代建築が取り壊されるという新聞記事をよく目にします。例えば二〇一一年一月六日の神戸新聞夕刊には、神戸市中央区にある村野藤吾設計の西山記念館が三月末に閉鎖されるという記事が掲載されていました、また一月三〇日の朝刊には、神戸市長田区にある清水栄二設計の西尻池公会堂が解体されるという記事が掲載されました。西山記念館は所有会社の東京移転に伴う利用者数減少や維持費の問題が原因とのことで、今後、解体されるか保存あるいは再利用されるかは未定だそうです。西尻池公会堂に

ついでには、建築家や市民が結成した「長田の近代建築を再発見する会」や神戸市が、この建物をテナントビルとしての再利用する案を管理会に打診していました。しかし、改築費用の問題や管理会の後継者がいないことから解体が決定したそうです。

私はこの記事を目にした後、あわてて両方の建物を見学に行きました。西山記念館は、阪神電車春日野道駅の近くで三宮バイパスと国道二号線が分かれる角地に建てられています（写真23）。阪神春日野道駅から、この建物の入り口までは地下道がつながっています。西山記念館の外観はロボットを思わせるような形をしています。外観上の傷みは見られません。音響効果を考えて設計された天井を持つ大ホール（写真24）も、絹の壁紙が使われている地下宴会場（写真25）も、まだまだそのまま利用できそうです。

一方、西尻池公会堂は、内部に入ることではできませんでしたが、一見しただけでかなり建物が傷んでいることがわかりました。この建物は、清水栄二が神戸市を辞めてから設計した建物ですが、御影公会堂にもある三角形の高い出窓と、壁面上部の左官仕上げによる蛇腹が特徴です（写真26）。特にこ



写真 24 西山記念館大ホール



写真 23 西山記念館（村野藤吾）

のような蛇腹を持つ壁は、全国的にも非常にめずらしいものだそうです。しかし、長期間手入れされなのまま放置されたためか、蛇腹部分が崩れ始めていました（写真27）。

人間に寿命があるように、建築にも寿命があります。建築の寿命というのは、建物が作られてから解体されるまでの期間ということですが、その長さには、物理的要因、機能的要因、経済的要因、社会的要因などが絡まって決まることとなります。物理的要因とは、コンクリートや木材などの劣化を意味し、一般的には「壊れる」と言われます。機能的要因とは、求められる機能を建物が十分に果たすことができなくなることを意味し、一般的には「時代遅れ」などと言われます。経済的要因は、建物のドライビングコスト増加や建物からの収益現象を意味し、「金食い虫」などと言われてしまいます。社会的要因とは、社会の変化の影響、例えば都市の空洞化や少子化により生徒数が減った学校、人通りが変わったため客が激減した商店街をイメージしていただければよいでしょう。

先ほどお話しした二つの建物のうち、西山記念館は、まだまだ使えるような



写真 26 西池尻公会堂（清水栄二）



写真 25 西山記念館地下宴会場

ので物理的要因は閉鎖の要因とはいえないでしょう。会社の移転という社会的要因、それに伴う維持管理費の捻出という経済的要因が主要な要因であると考えられます。一方、西尻池公会堂は、費用がかさみ維持管理ができない、したがって建物の傷みが進む、利用者数も減るという経済的要因と物理的要因と社会的要因とが悪循環に陥って解体が決定した典型的なケースと考えられます。

図3は、建築の寿命の概念をグラフにしたものです。横軸は時間、縦軸は建物の性能を表します。ここでいう性能とは、物理的な劣化や機能の陳腐化、維持管理の費用など複数の要素を統合した概念です。またグラフの実線は建物の性能の変化を、点線はその建物に要求される性能を表します。

建物の性能は、時間の経過とともに低下していきます。したがって建物の性能が、要求される性能を下回った時点Xを寿命と考えることができます。図3では、建物に要求される性能を一定としています。現実には高度情報化社会への対応やバリアフリーへの対応など建物に要求される性能はどんどん高くなっていくものと考えられます。すなわち、建築の寿命は短縮される

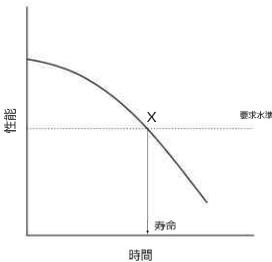


図3 建築の寿命の概念



写真27 痛みが激しい西池尻公会堂蛇腹部分

方向にあると考えることができます。

かつて日本の建築業界では、スクラップ・アンド・ビルド、すなわち古い建物を壊して新しい建物を建てるのが当たり前に行われてきました。わが国では近代建築に対する価値観がなかったこと、新しい建物を建てるのが経済活動を活発にするという考え方が根強かったことが原因でしょう。しかし、次第に日本社会の価値観も変化し、持続可能性を持つ社会が求められるようになりました。現在では、建築の寿命をどのようにして延ばすかが大きな課題となっています。

皆様は、リフォームという言葉をご存じかと思えます。リフォームは、建築の寿命を延ばす手法の一つですが、その工事の程度によつて補修と改修に区別されます。補修とは、低下した建物の性能を初期レベルまで回復させる工事をいいます。また、改修とは、建物の性能を初期レベルを上回るものにまで高める工事を言います。図4のAが補修、Bが改修であり、いずれも建物が要求水準を下回る前に行うことで、建築の寿命を延長できることがわかります。

また、建築の寿命を延ばす方法として、リノベーションがあります。リノベーションとは、機能的要因や社会的要因によつて寿命が尽きた建物を異なる目的に転用して建築の寿命を延ばす、いわば蘇生させる手法です。

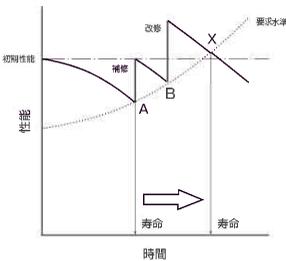


図4 リフォームにおける補修と改修の概念

大阪の谷町や京都の町屋が、カフェや雑貨店に改装されて人気を呼んでいます。町屋は建物の規模が小さく、改装費用が少なくすむため、若い人がリノベーションを行ったものも多くあります。しかし、大型の建物のリノベーションは、そう簡単にはできません。行政の理解が必要だと思います。写真28は輸出生糸の検査を行う施設として清水栄二が一九二七年に設計した旧神戸市立生糸検査所です。この建物は、二〇〇八年まで隣接する旧国立生糸検査所とともに独立行政法人農林水産消費技術センターの施設として使用されてきました。しかし、施設のポर्टアイランド移転に伴い、跡地が競売に出され、取り壊しが心配されていましたが、神戸市が買い取ってデザインクリエイティブセンターにリノベーションされることになり、取り壊しを免れることができました。



写真 28 旧神戸市立生糸検査所（清水栄二）

四、フランク・ロイド・ライトとヨドコウ迎賓館(旧山邑邸)

では最後にフランク・ロイド・ライトについて、お話ししたいと思います。

ライトは、一八六七年にアメリカのウイスコンシン州マディソンに生まれました。ウイスコンシン大学土木学科を中退後、シカゴに出て設計事務所で働き始めました。最初の設計事務所を一年ほどで退職した後、ルイス・サリヴァンという建築家の事務所(アドラー＝サリヴァン事務所)に勤務しました。サリヴァンの事務所では、住宅設計を任せられていましたが、ライト個人のアルバイトが原因で退職することになります。そして、一八九三年に独立して自分の設計事務所を設立します。独立後は、「プレイリースタイル」と呼ばれる大草原に張り付いたような独特の住宅スタイルを確立して、建築家としての名声を得ます。

その後ライトは、二百もの住宅を設計しましたが、一九〇五年にクライアントの奥さんであったチェニー夫人と不倫事件を起こし、ヨーロッパへ駆け落ちしてしまいます。二年後の一九一一年、帰国したライトは、ウイスコンシン州スプリンググリーンに事務所を構え、設計活動を再開しますが、不倫事件によりかつての名声は失われていました。さらに徐々に仕事が回復してきた一九一四年、チェニー夫人が発狂した使用人により殺害されるという事件が起こります。

しかし翌年、悲劇のどん底にあったライトのもとに、帝国ホテルの支配人・林愛作から東京の帝国ホテル設計依頼が持ち込まれます。林はかつてニューヨークの日本美術を扱う会社に勤務しており、浮世絵の蒐集を始めたライトとは旧知の仲でした。アメリカ人には、日本人以上に浮世絵に興味を示す人がたくさんいますが、ライトもその一人だったのです。

ライトが日本に興味を持ったのは、一八九三年にシカゴで開催された万博の時といわれています。シカゴ博には、「鳳凰殿」という日本のパビリオンが建てられました。このパビリオンの名前は、宇治・平等院の「鳳凰堂」と似ていますが全く異なるもので、平安時代、室町時代、江戸時代の様式をすべて盛り込んで設計された、いわば日本建築のショールームのような建物でした。しかし、当時、アドラー＝サリヴァン事務所に勤務していたライトは、日本人大工による鳳凰殿の建築の様子をじっくりと観察していたのでしよう。

そしてライトは、一九〇六年に日本を訪れ、日光や箱根に滞在しました。続いて一九一五年、帝国ホテル設計の依頼を受けたライトは二度目の来日を果たしましたが、ホテル側と工事予算の折り合いがつかず、完成を待たずに帰国してしまいました。ライトの帰国後は弟子たちが工事を引き継ぎ、一九二三年に帝国ホテルを完成させます。このときの弟子の一人である遠藤新は、西宮市に旧甲子園ホテルを設計しています。

ライト設計の帝国ホテルは、一九六八年に解体され、現在は表玄関のみが愛知県犬山市にある明治村に保存されています。

帝国ホテルの設計に関わった六年間、ライトは日本において帝国ホテル以外にも設計依頼を受けます。このときの計画案は、帝国ホテルを含めて十二件で、その半数が実際に建築されています。現存する作品としては、来月見学を予定している「ヨドコウ迎賓館（旧山邑邸）」（以後、旧山邑邸と表記）と、池袋の「自由学園明日館」があります。旧山邑邸は鉄筋コンクリート造ですが明日館は木造で、現在も自由学園の記念館として使われています。ライトの海外における作品は、カナダと日本にしかありません。ただ、カナダはアメリカと陸続きで、ライトが拠点としたシカゴやウイスコンシン州にも近い国です。このように考えると、ライトの本当の意味での海外における作品は、日本だけに存在すると言ってもよいでしょう。これはライトと同時代の有名建築家で、多くの国に作品を残しているル・コルビジェやミース・ファンデル・ローエと異なる点です。

日本からアメリカに戻ったライトは、一九三九年に「落水荘」と呼ばれるカウフマン邸の完成により、建築家としての名声を取り戻します。このときライトは六十八才でした。そして、ジョンソンワックス社やグッゲンハイム美術館などを設計し、一九五九年に九一歳で死去します。

さて、阪急芦屋川駅を降り、北口から外に出て芦屋川沿いに視線を送ると、小高い丘の上に旧山邑邸を

望むことができます（写真29）。写真からもおわかりになると思いますが、旧山邑邸は、ライトの名を高めた「大草原に平らに張り付いたような住宅スタイル」、すなわちプレイリースタイルとは異なり、突き出した二本の煙突が建物の垂直方向への伸びを感じさせます。この件について、私なりに解釈してみました。

広重の作品に「山海見立相撲（さんかいみたてずもう）」というシリーズものの浮世絵があります。その中に見られる山、例えば上総鹿楚山（かずさかのうざん）が、旧山邑邸が建つ丘の形とよく似ています。現在は西側にマンションが建てられていますが、旧山邑邸が計画された当時は丘の斜面だったと思います。浮世絵の収集家でもあったライトは、この浮世絵に似た景観を生かし、日本に造るべき家のデザインを考えたのではないのでしょうか。

また、写真30は、旧山邑邸入口付近まで丘を登って振り返ると目に入る景観です。この景観は、敷地内に入ると一旦視界から消えます。しかし、玄関に続くアプローチの坂を上り、玄関前の車寄せに到着すると、そこにある開口部からもう一度この光景が目飛び込んできます（写真31）。このような開口部をピ

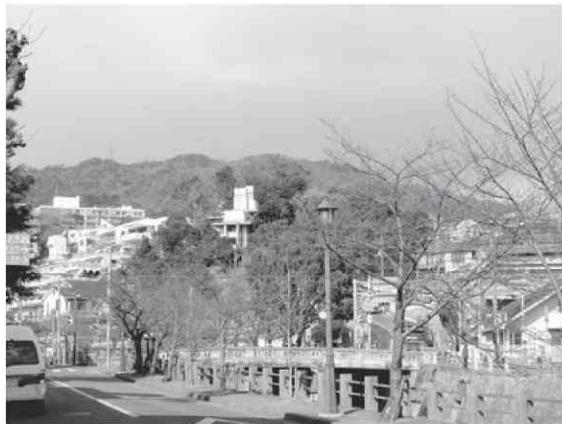


写真 29 阪急芦屋川駅から望む旧山邑邸（フランク・ロイド・ライト）

クチャーウインドといいますが、なかなかドラマチックな演出です。当時は
高速道路もなく、海がもつと近くに広がって見えたことでしょう。この手法
とよく似た手法が、ライトが帰国後に名声を取り戻すきっかけとなった作品
である落水荘にも見られます。

それでは最後に、旧山邑邸が近代建築保存に果たした意義について簡単に
ご紹介したいと思います。旧山邑邸は、現在、国の重要文化財に指定されて
います。しかし、一九七一年には取り壊しの危機に直面したことがあります。
所有者の淀川製鋼所が、この場所にマンション建設を計画したのです。この
ニュースが発表されたとき、ちょうど日本建築学会が大阪で開催されていま
した。そこで、学会に出席していた有志が集まって対策を検討し、淀川製鋼
所や行政に対して保存要望書を提出しました。この要望について淀川製鋼所
は理解を示し、マンション建設を中止し、旧山邑邸の重要文化財指定のため
の活動に参加しました。その結果、一九七四年に明治時代以降に建てられた
建築として、また鉄筋コンクリート造の建築として初めての重要文化財指定
を受けることになったのです。この決定は、近代建築保存への道が開かれる



写真 31 旧山邑邸玄関のピクチャーウインドからの眺望



写真 30 旧山邑邸入口付近からの眺望

大きなきつかけとなりました。

来月には、旧山邑邸の見学会があります。実際の建物を見学しながら、皆様といろいろお話させていただきます。ただきたいと思います。今回の講義は、これで終わらせていただきます。ありがとうございます。